

KONAN Diversity & Inclusion Project
彩り豊かなキャンパスの成長に向けて



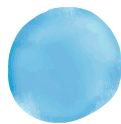
2025年度 甲南大学基礎共通科目「DE&I入門」公開授業

彩り豊かなキャンパスの成長に向けて

2026年1月16日 金
14:40~16:10

甲南大学岡本キャンパス
132講義室 (1号館3階)





0 はじめに 司会:北川 恵 文学部教授

1 開会の挨拶 甲南大学副学長 学生支援機構長 渡邊 順司教授

2 DE&I入門 第1・2回講義の振り返り
—DE&Iとは何か 甲南大学学長補佐 阿部 真大 文学部教授

3 DE&I入門 第3回講義の振り返り
—育ちのなかのD&I 北川 恵 文学部教授

4 DE&I入門 第6回講義の振り返り
—学校と職場のいじめ問題 大西 彩子 文学部教授

5 DE&I入門 第8回講義の振り返り
—スポーツとジェンダー 関 めぐみ 文学部准教授

6 DE&I入門 第14回講義の振り返り
—日本の司法制度における人権問題 笹倉 香奈 法学部教授

7 DE&I入門 総括コメント 池上 知子 文学部特任教授

8 DE&I入門 第10回講義の振り返り
—イスラームと共生 中町 信孝 文学部教授

学生報告

9 からふる 活動報告 文学部3年次 藤井 舞衣子さん

10 DE&I アンケート結果報告 文学部3年次 関 凜華さん
文学部3年次 谷口 翔希斗さん

11 総括 甲南大学副学長 全学教育推進機構長 高 龍秀教授

**「DE&I入門」
公開授業・公開セミナー**



**日時：2026年1月16日(金)4限
14:40～16:10**

場所：132講義室

2025年度より開講した「DE&I入門」。ジェンダー、いじめ、障がい、性的マイノリティ、グローバルなどのテーマを掘り下げてきました。これらの学びを総括し、甲南大学の状況に目を向ける講義最終回を、「公開授業・公開セミナー」として、履修していない学生や教職員に公開します。履修していただく学生や教職員に公開します。履修してご参加ください。

定員50名
先着順

こちらのQRコードよりお申込み
ください。(履修登録者は申込不要)



甲南学園ダイバーシティ&インクルージョン宣言

甲南学園の創立者である平生三郎は「人格の修養と健康の増進を重んじ、個性を尊重して各人の天賦の特性を啓発する人物教育の率先」を主唱しました。また、異なる背景を持つ人々が互いに尊重しあい支えあうことで共に成長し、社会全体の進歩に寄与するという「共働互助」の精神の重要性を説きました。学園の創立から一世紀を経た今も、私たちは、一人ひとりが持つ独自性と潜在能力を尊重しあい、それぞれの天賦の才を発揮することができる環境を維持し、発展させています。

ダイバーシティ(多様性)の尊重とインクルージョン(包摂)の推進は、私たちが大切にしてきた、これらの理念と軌を一にするものです。すべての学生・生徒、教職員一人ひとりの人権と多様な価値観を尊重し、個人の成長を支え、社会全体の発展に寄与するような人物を育て輩出することは、私たちが追求する「人物教育」の基盤です。

様々な背景や視点を持つ人々が各自の天賦の才を発揮し、その力が集合することで、より豊かな学び・研究の環境が形成され、働きやすい職場環境と新たなアイデアや解決策が醸成されます。お互いの違いを理解し尊重しあうことは、共生社会の実現に寄与する人物を育成することにつながります。

ダイバーシティとインクルージョンのさらなる推進は、学園に集うすべての人の成長と喜びをもたらすだけでなく、これからの社会全体の発展にも欠かせない取り組みです。

私たちはこのような考え方のもと、これからも積極的にダイバーシティとインクルージョンを推進し、より良い未来への道を切り開くことを決意し、次のおり宣言します。

甲南学園は、多様な背景を持つ学生・生徒、教職員が集い、互いの違いを尊重しあう、彩り豊かなキャンパスの発展に努めます。性別、国籍、人種、民族、年齢、宗教、信条、社会的属性、性的指向・性自認、障がいの有無等に関わらず、すべての構成員のアイデンティティを認め、能力を最大限に発揮できるよう支援します。あらゆる差別やハラスメントのない、多様な個性が表現され育まれるキャンパスづくりに力を注ぎます。

甲南学園は、学生・生徒一人ひとりの人権を尊重しつつ、その能力と人格の陶冶を目指す教育を提供し、社会的課題に積極的に取り組み、社会全体の発展に寄与する人材を育成します。

甲南学園は、支援を求める声に対して適切に配慮し、そのニーズに応える環境を整えます。障がいだけでなく、自らでは解決が困難な状況にある学生・生徒や教職員に対し、合理的配慮のもとに、支援の提供や、必要な施設・設備の整備を積極的に行います。

甲南学園は、すべての構成員に対してダイバーシティとインクルージョンに関する定期的な研修と啓発活動を行うことを通じて、学内の意識向上を図ります。様々な組織・研究分野間の協力を促進し、構成員の多様性を価値ある資源に昇華させ、社会に貢献します。

甲南学園は、同窓生や地域社会をはじめとする学内外のコミュニティと連携し、公正でインクルーシブな社会の実現に向けた取り組みを推進します。

2024年3月1日

『DE&I入門』第15回目講義

(公開授業)

日時:2026年1月16日

開会 14時40分

0 はじめに

司会:北川 恵 文学部教授

開始時間になりました。DE&I入門の講義も今日が15回目、最終回になります。以前から掲示等でもアナウンスしておりましたとおり、今日の最終回の講義は公開となっております。授業科目登録の学生以外の方もようこそご参加下さり、ありがとうございます。どうぞよろしくお願いたします。また授業科目履修の方は、後ろ3列空けて、その前に座って下さい。また本日の授業内容は、録音し冊子にまとめますので、どうぞご了承ください。

さて皆さんは全15回、毎週金曜日のこの時間、各種のテーマについて学んでこられました。今日はどのような内容で進むのか、最初にお知らせいたします。



この授業科目名称でもあります「DE&I」。すなわち「ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン」の入門授業は、甲南大学で今年度初めて開講した科目です。この授業を開講するに当たって、3年前から KONANプレミア・プロジェクトという全学的に実施されているプロジェクトの中で、ダイバーシティ&インクルージョンの取組みを継続して進めてきました。そこに関わってきたメンバーを中心に今日は講義を行います。最初に、本プロジェクトのリーダーでいらっしゃる甲南大学副学長で学生支援機構長の渡邊先生にご挨拶いただき、その後、授業を担当したプロジェクトメンバーの教員5名が登壇します。この授業科目はシラバスに記載の通り、皆さんに10回、課題を出しました。それらを各教員が10点満点で評価しますとお伝えしていました。今日は皆さんが書いてくださったレポート課題に対して各教員がフィードバックを返していきます。

その後、文学部特任教授の池上先生。池上先生はこの授業に全回出席くださいました。池上先生からも授業内容を総括いただきます。

なお学生の皆さんは、既に1度受けられた授業内容です。それぞれの授業の課題も良く考えて提出されたと思います。それらについて今日、各先生方のフィードバックを聞いていただき、それを受けて改めて気づいたことや、他の受講生がどのようなことを考えたのかにも触れていただき、気づいたことをフォームに記入してもらいます。ここは皆さんが授業中に取り組んでいただく内容になります。

その後、最初の授業のときを覚えていますか。ダイバーシティの実態と意識に関するアンケートに回答していただきました。そのアンケートのフィードバックをします。アンケートの際、学生たちが参加している DE&Iに関する活動を紹介し、参加者募集も行いました。その活動から、本日は「からふる」というチームが活動の紹介をしてくださいます。そして、締めくくりの言葉を甲南大学副学長で全学教育推進機構長の高先生にさせていただくという流れになっています。

それでは早速、渡邊先生よりご挨拶を頂きます。どうぞよろしくお願いいたします。

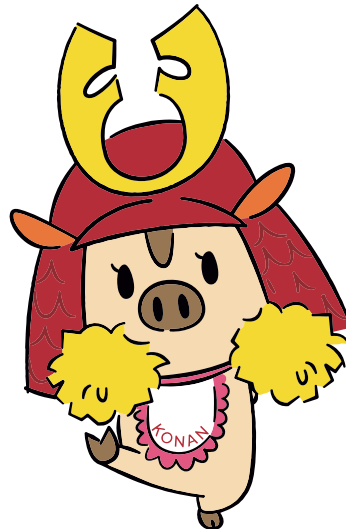


さらに加えて甲南大学外でも様々に活躍しておられる先生にお越し頂き、ゲストスピーカーとして、お話を聞かせていただきました。鹿野由行先生、森隼人先生、伊地知紀子先生、ほんままな先生です。そのおかげでこのように非常に盛りだくさんな内容で、あらゆる視点からお話しすることができたわけです。

今回は、プロジェクトメンバー教員5名、すなわち文学部の阿部先生、私：文学部の北川、文学部の大西先生、文学部の関先生、法学部の笹倉先生の順で、授業の概要を復習しながら、皆さんが課題で書いてくださった内容についてフィードバックを行っていきます。そして、池上先生に総括的なコメントをいただきます。

そして皆さん、ここからが皆さんに行って頂くことですので、よく聞いておいてくださいね。各授業の中で、皆さんはそれぞれの課題に取り組みましたが、それらを思い出しながらフィードバックを聞き、新たにどのような気づきがあったかを振り返ってください。その内容をフォームに記入していただきます。各教員、皆さんの課題をしっかりと読んだ上でフィードバックをしていただきますので、皆さんもそこから気づいたことを自分の言葉で書いてください。

では、阿部先生からお願いしたいと思います。



2 DE&I入門 第1・2回講義の振り返り —DE&Iとは何か

甲南大学学長補佐 阿部 真大 文学部教授

皆さん、お久しぶりです。第1回目と第2回目を担当しました、文学部社会学科の阿部です。まず、第1回、第2回の講義内容を簡単に振り返りたいと思います。続いて、皆さんのレスポンスカードを読ませていただき、特に反響の大きかった点についても触れたいと思います。

第1回では、D&I(ダイバーシティ&インクルージョン)について、「何を」「どのように」扱うのか、そしてそれを学ぶことにどのような意味があるのか、という話をしました。

現在、世界的にはD&Iに対するバックラッシュが強まり、揺り戻しの動きが起きています。しかしそのような状況の中でも、日本社会が持続的に発展していくためには、D&Iは依然として重要なテーマである、というところから話を始めました。

その重要性を、主に三つの観点から説明しました。

第一に、法学的観点です。人権を守ることは社会の基本です。D&Iは、一人ひとりが人間らしく生きられる社会を目指す概念であり、その意味で極めて重要です。差別を許さず、平等な権利を保障することは、近代社会の根幹をなす原理です。この点において、D&Iは「近代社会において最低限、守られるべき規範」として位置づけられます。

第二に、経済学的観点です。企業の内部が同質的である場合、イノベーションは生まれにくくなります。多様性は企業の競争力を高め、D&Iは企業を強くするという議論を紹介しました。外国人労働者、とりわけ高度人材の受け入れは、日本企業の競争力向上という観点から、極めて重要です。





第三に、社会学的観点です。社会学の立場から見ると、D&Iは制度や経済の問題だけではなく、人と人との関係のあり方の問題でもあります。「正しい」という主張だけでは、人は必ずしも動きません。むしろ正しさを強調しすぎると、反発を招くこともあります。だからこそ、自分とは異なる他者を「仲間」と思える感情を育てることが重要になります。これが「感情教育」です。特に幼少期から、他者への共感力や想像力を育てることが、D&Iを支える強固な基盤になります。また、社会的に見れば、異質な他者を受け入れることは単に「正しい」からでも「強くなる」からでもなく、それ自体が意味を持つ社会的経験です。異なる背景を持つ人びととの関わりは、ときに戸惑いを伴いながらも、新しい視野を開き、自分自身を相対化する契機になります。私自身の異文化交流やバックパッカーの経験を例に挙げながら、多様な他者と出会うことの「楽しさ」についてお話ししました。

このように、法学・経済学・社会学という複数の視点から整理することで、D&Iの意味がより立体的に見えてくる、というのが第1回の内容でした。

第2回は、私の専門である社会学の観点からの講義でした。

まず、取り上げたのが「だめ連」です。「だめ連」とは、「普通の人のように働かない(働けない)」「家族をもたない(もてない)」といった、社会の「標準」から外れていると見なされがちな人々が、その「だめ」をこじらせることなく、社会からのプレッシャーや「常識」を問い直しながら自由に生きようとして生まれた集団です。たとえ大きな政治的な力にはならなくとも、自分の身の回りから生きやすい居場所をつくっていきましょう、ということで、「アナキズム」の実践例として紹介しました。

オルタナティブな生き方は、実はとても小さなところから始まります。家族の形を少し問い直してみる、異なる人と関係を結んでみる。そのような小さな実践が、実はとても重要なのだと述べました。

後半では、サザエさんの「近代家族」のモデルが賞味期限を迎える中で、多様な家族のあり方(「沈没家族」について紹介しました)が模索されていること、企業においては、多様性を「抵抗・同化・分離」の段階を経て「統合」へと高めていく試みが進んでいることなどを紹介し、現代社会がいかに変わってきているか、それに我々はどう対応していけば良いのか、ということについて話をさせていただきました。思い出してもらえたでしょうか。

皆さんからのレスポンスカードはすべて読ませていただきました。私の学生時代とは異なり、授業内容を驚くほど丁寧にまとめてくれる方や、自身の経験に基づいた深い考察を寄せてくれる方が多く、学びに対する真摯な姿勢が時代と共に進化していることを強く実感しました。

特に反響が大きかったのは、映画『ワンダー 君は太陽』の次の一節です。

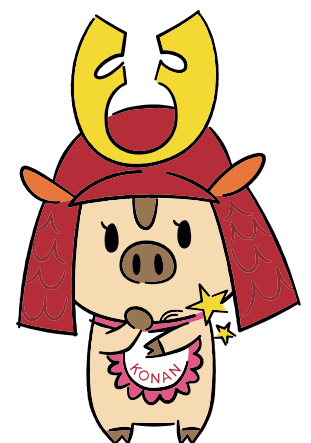
“When given the choice between being right and being kind. Choose kind.”

(正しくあることと親切であること、どちらかを選ぶなら、親切であることを選べ)

知性は時に「極端」に走ることがありますが、豊かな感情は人間関係の「緩衝材」となり、衝突を防いでくれます。D&Iの本質は「仲間を増やすこと」です。仲間だと思えない相手に優しくはできません。だからこそ、自分とは違う他者を仲間だと思えるような、豊かな感情を育てることが大切なのです。

また、2回目の講義で触れた、「勝ち組/負け組」という二元論から降り「抜け組」として自分なりの幸せを追求するという考え方にも多くの共感が寄せられました。「だめ連」という1990年代の貴重な思想的資産を、新しい世代の皆さんにバトンタッチできたことを嬉しく思います。

第1回、第2回を通じ、皆さんが多様な視点を持ってこれからの学生生活を送る一助となれば幸いです。ありがとうございました。





3 DE&I入門 第3回講義の振り返り —育ちのなかのD&I

北川 恵 文学部教授

それでは第3回目です。第3回は「育ち」がキーワードでした。育ちにおいて「アタッチメント」が大切な基盤となること、それをマイノリティな育ちでどう支えることができるかを考えてほしい、という内容のお話でしたね。

最初に復習ですが、「人の育ちに不可欠なことは？」という問いを立てました。皆さん、いろいろと教えてくださいました。「お金がないと」、「ご飯がないと」、「家がないと」等々、教えてくださいました。それは本当にそのとおりです。

育ちにおいて多様であっていいことは何だろうか、ということも問いました。何か食べないと私たちは生きていけません、何を食べるか、ということが多様でいいといえます。



特に私は心理学が専門ですので、人の発達を考えたときに、「アタッチメント」という概念が大事なキーワードになります。震災孤児たちを見ていると、衣食住だけでは足りないということが発見されたのです。では何が足りないのだろうと言いますと、養育者との絆が足りない。そのことは人の育ちにおいてすごく大事なことだということが分かってきました。

どんなときに大事なのかと言いますと、例えば今この場所で安全と安心が確保されているから皆さん学びに集中できるわけです。ここに強い地震などが発生したら、身の安全を確保することが最優先になるわけで、安全と安心を確保したいというのは優先度が高い欲求です。それが自分だけではどうしようもないときには、頼りにできる人にくっついて、安全や安心を得たいという本能を人間みんな持っています。それがアタッチメント欲求です、というお話をしました。アタッチメント欲求が満たされること、つまり、頼りにしている大人、あえて養育者と呼びます、血縁のある母に限らず、頼りにしている大人から安全と安心をしっかりもらえていることが、発達の過程でとても大事な基盤になるということが発達心理学の研究から分かってきたのです。

一方で、アタッチメントについては誤解も多いというお話もしましたと思います。まず、子どもが親にくっつくことは未熟な依存だから早く抜け出したほうがいいと言われることがあります。アタッチメントはそうではなく、むしろ困ったときはちゃんと頼りにできる人がいるから、いろんな挑戦ができる。むしろ自立を促すものだ、と言えます。また、アタッチメントは“母親”の役割ですよ、という誤解もありましたが、決してそんなことはありません。子どもが頼るのは、日頃から世話をしてくれる養育者であるということも明らかになってきました。さらに、幼い頃の経験は決定的である、いわゆる3歳までが全て、などと言われたこともありましたが、そうではありません。人はその後の経験で変わります。例えば幼い頃に家族の中でつらい経験があっても、その後親身に関わってくれる人との出会いがあれば、あるいは、今の安全な状況の中で、しっかりと聞いてくれる人がいて、昔の経験を整理していくことができれば、変わっていくのです、ということもお話ししましたね。



そのような関わりをするためには、養育者にも支えが必要なのです。「子育て不安」といったことが注目され始めた頃に、「それって母親失格だ」と言われた時代もありましたが、いやいや、母親の置かれている状況がいかに孤立した状態で、1人で責任を背負い、子育ての経験もないまま対応しているゆえの大変さなのだ、ということが分かってきました。そのような流れの中で、養育者も物理的にも情緒的にも支えられることが不可欠なのだと分かってきたというお話もしたと思います。

子どもは大人から安全と安心をもらいたい。大人もそれを提供できる。そのようなことがすごく大事なのですが、それは実はいろいろな形で実現できるのだ、というお話をした中で、ではマイノリティな育ち、あるいは子育てをしている人たちを、どのように支えることができるのでしょうかと問いかけました。支援があり、偏見をなくしていくことによって、そのような立場の人たちが本来持っている強みを発揮することができるのではないか、ということをお話しました。

第3回目の講義の皆さんへの課題は、「マイノリティの育ちの例を一つ取り上げてください。何でもいいです。皆さんが思い浮かぶのを取り上げてください。そしてその人たちの状況を思い浮かべて、強みや困難を考えると、あなた自身、あるいは地域社会が、どうしたら困難を減らして強みを発揮していけそうでしょうか」とお聞きしました。

<マイノリティな育ちの例>は、いろいろな例を挙げていただきました。この資料(図3)の上部は意見が多かったものです。下部は、挙げてくださった人数は少ないですが、それぞれ大切なテーマですね。

学生の皆さんが課題に書いた内容

<マイノリティな育ちの例>

- ・外国籍、外国ルーツ、複数文化家族、帰国児童
- ・被虐待、ネグレクト、施設養育、里親養育
- ・性的マイノリティ、LGBTQ+ (自身が、親が)
- ・ひとり親
- ・身体障害、発達障害、聴覚障害 (自身が、親が、きょうだいが)

- ・少数民族、人口の少ない地域 (田舎、島) 育ち、部落
- ・貧困、離婚再婚を繰り返す、ヤングケアラー
- ・転動族、祖父母と暮らす、夜職家族、共働き
- ・不登校経験者、インターナショナルスクールに通う、左利き

【図3】学生の皆さんが課題に書いた内容

学生の皆さんが課題に書いた内容

<強み>

- ・(苦勞している分) 共感性・自立心・柔軟性等がある。

→その状態になるために、何が必要?

アタッチメント理論…安心基地・安全な避難所があるから自立できる

<支援>

- ・制度や支援体制
- ・姿勢や理解 (本授業もその一つ)
- ・同じ立場の人と交流できると「自分の状況や、悲観的に捉える理由を客観視できる」。

「マイノリティな育ちという言葉自体使いたくない。無意識に少数派を作り出すような気がする。」

【図4】学生の皆さんが課題に書いた内容

<困難>については、いろいろな状況に共通して、「孤独」「孤立」という言葉が挙がっていました。また現実的なバリアといったハード面や、私たちの理解の不足といったソフト面などを書いてくださっていました。

<強み> (図4) については、いろいろな状況に共通して、「苦勞している分、共感性がある」や、「苦勞している分、自立心が高い・柔軟性がある」などの記述が多かったです。そのように苦勞を強みにしていけるといいのですが、その状態になるために何が必要でしょうか、ということをお話して、改めてみなさんに聞きたいなと思いました。一例として、アタッチメント理論を紹介しましたが、今が安全で、安心して頼れる人がいる状況ですと、苦勞を前向きに整理することができるかもしれません。

<支援>については、制度や支援体制の角度から考えた人もおられましたし、姿勢や理解などの大事さを考えてくださった人や、この授業が考えるきっかけの一つではないか、と書いてくださった方もおられました。

ぜひ取り上げたいと思いました意見を、少し要約してお伝えします。「同じ立場の人と交流できると、自分の状況や悲観的に考える理由を客観視できる」と書かれた人がおられました。すごく感心しました。「同じ境遇の人と関わることが、なぜどのようにならなければならないのか」というところまで含めて書いてくださった意見だなと思いましたので。

さらに、「マイノリティな育ちという言葉自体使いたくない。無意識に少数派を作り出すような気がする」との意見もありました。大切な問いだと思います。皆さんはどう思われますか? 少数派ということ、どのような意味合いを持って皆さんが感じるかにも関わるといいます。多様であることは当たり前、そのなかには多数派もいれば少数派もいるのも当たり前、等しく尊重されるのも当たり前、という感じの視点をもっと私たちみんなが持てるようになることも大事かなと思いました。

いかがでしょうか。幾つか提示しました新たな問いかけについて、皆さん気づいたことをまたお聞かせください。私からは以上です。



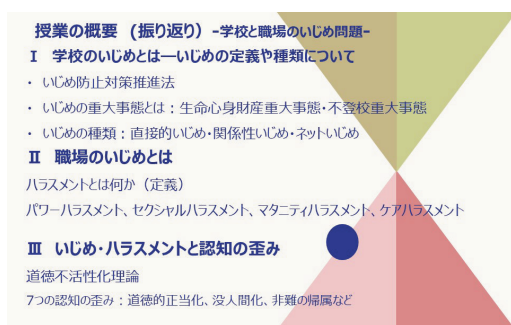
4 DE&I入門 第6回講義の振り返り

大西 彩子 文学部教授

—学校と職場のいじめ問題

では続きまして、私から第6回目の授業についてお話しさせていただきます。授業の振り返りを短めにお話ししますね。学校と職場のいじめ問題についての授業でしたが、覚えていらっしゃいますか。

まず、学校におけるいじめについて説明しました。“学校”のいじめについては、皆さんは小・中・高と長く学校生活を経験してきているので、何となくイメージがつくのではないのでしょうか。そのいじめというものが、どうして多様性の問題なのかと考えますと、いじめというものが人権侵害である、ということです。そしてなぜ DE&Iの問題か、ということについては、いじめ防止対策推進法というものが施行されたこと。いじめの重大事態、例えば生命、心身、財産に関わる重大事態や、不登校重大事態について説明させていただきました。(図5)

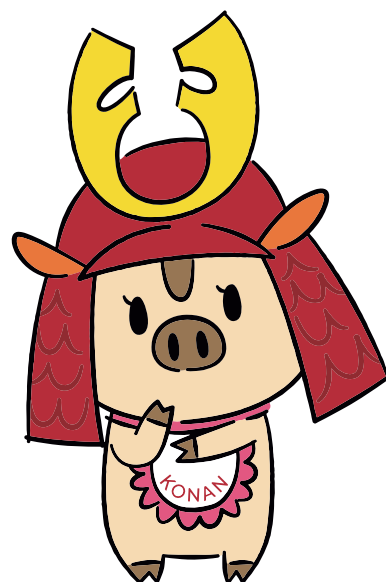


【図5】授業の概要(振り返り)-学校と職場のいじめ問題-

皆さんにはリアクションペーパーを書いていただきましたが、不登校重大事態については、何故だか「30日」という言葉がすごく印象に残ったようで、かなり多くの方が「30日」という言葉を書いておられました。よく覚えてくださいましたね。不登校=30日、ですね。文部科学省が「病気や経済的理由を除き、心理的・身体的・情緒的な要因により年間30日以上欠席した状態」を不登校と定義していたのでしたね。そして、いじめの種類は、直接的いじめ、関係性いじめ、ネットいじめが存在することも説明しました。

職場でのいじめというものは、20歳を超えたら、もうそろそろいじめという言葉を使わずに、ハラスメントと使われます。今でしたら、もう高校生あたりからハラスメントじゃないか、という議論もありますので、ハラスメントという概念のお話をして、ハラスメントの定義を確認しました。パワーハラスメント、セクシュアルハラスメント、マタニティハラスメント、ケアハラスメントなどがありましたね。覚えておられますか？

最後に、いじめ、ハラスメントと認知のゆがみについて、最近の議論をお話し、私の研究課題であります「道徳不活性化理論」という、心理学の理論を皆さんにお伝えしました。そこでは7つの認知のゆがみがあり、今日は全部まで言いませんが、「道徳的正当化」と「没人間化」と「非難の帰属」などをお話しました。あと4つ、ありましたね。これらがいじめの授業のまとめです。





さて、皆さんのリアクションペーパー、課題に書いていただいた文章を、学び・気づきを示す文を抽出してみました。ちょっと心理学者っぽくやってみた訳です(笑)。皆さんが書かれた内容では、例えば抽出の際のワードとしては、「学ん」、「学び」、「気づ」、「理解」、「意識」、「考えさせ」、「考えるよう」、「大事だと」、「必要だと」、「と思った」、「と感じた」というもので、この言葉が含まれた文章があれば抽出する、ということを行い、それらの文字が入っている文章をカテゴリーごとに質的に分けました。これらが詰まるところ、この授業を受けた皆さんの学びの部分が抽出されているということになるのではないかと思います。

カテゴリーに分類した結果、自己関連づけが62件、構造理解が31件、社会的文脈・文化が15件、感情的反応が5件、対策や支援について4件、それぞれありました。

これが何のことを意味するのか？

自己関連づけに分類された皆さんのコメントというのは、どのようなことかと言いますと、いじめ・ハラスメントの問題を、自分自身の身の回りに当てはめて考えてみて、それを理解しようとしたのか、もしくは、自分自身の周りについて考えてみて、何か認識が変わった、理解が促された、という少しでも学びが進んだと言われている部分です。例えば「今回の講義で学んだように、いじめは冗談やしつけという言葉にすり替えられたり、責任の転嫁や被害者への非難によって正当化されたりすることがあります。今後は、自分の言動が他人を傷つけていないかを意識し、どんな立場でも人を尊重し合える関係を築いていきたいと思えます」のようなものです。

次は構造理解。こちらは、いじめやパワーハラスメントを個人の問題として捉えるのではなく、環境や社会、集団の問題として捉えようという皆さんの認識です。これは職場でのパワーハラスメントや過剰な責任の押しつけという形でも再現されており、結局のところ、「人間関係のゆがみがどの年齢層にも共通していることに気づきました」、「いじめやハラスメントをなくすには、他者の考えなどの尊厳を尊重する心を持つことが大切で、学校や職場だけでなく、あらゆる対人関係において意識すべき視点であると考える」のように書いて下さっていました。

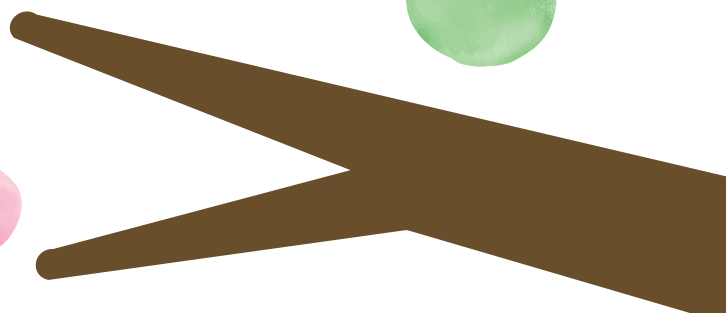
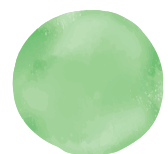
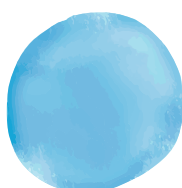
社会的文脈・文化の例ですと、「学校だけでなく、職場でも同じような行動が起こると知り、人間関係の中で優越感や価値観の押しつけがいかに危険かを考えさせられました」と書いて下さった方がおられました。

また「いじめの問題を「個人の悪」ではなく、「人間関係の課題」として捉え、被害者と加害者の双方が回復できる社会的支援の在り方について考えることが必要だと思いました」などがありました。

これら以外に、件数としては多くはありませんが、感情的反応に言及されたコメントや、対策・支援のコメントもありました。感情的反応は怖い、悲しい等のようなものですが、こちらは被害者に対して皆さんが持たれた感情というよりは、「自分が加害者になることが怖い」という感情が多くありました。対策・支援に関しては、「いじめをなくすためには個人の意識を変えるだけでなく、周囲が声を上げやすい環境づくりが重要だと思いました」というような、今後どうしたら良いのか、に関する皆さんのコメントがありました。

これらのような形で皆さんがいろいろと学びを深めてくださって、とてもうれしかったです。

以上です。ありがとうございます。



5 DE&I入門 第8回講義の振り返り —スポーツとジェンダー—

皆さん、こんにちは。私は第8回「スポーツとジェンダー」を担当しました。それから第9回の鹿野先生の際にも、赤ちゃんとともにこの教室にやって来ました。

では、授業の振り返りをします。最初に投げかけた問いは、「多様な人が共にスポーツを楽しめるようにするためには？」というものでした。これをジェンダーの視点から考えてみようという内容で進めました。

途中、SLIDO(スライド)というクリッカーのような仕組みを使い、「皆さんは、体育が好きでしたか？」という質問に回答していただきました。好きな人が嫌いな人よりも少しだけ多いという結果は、(好きな人の周りには好きな人が集まり、嫌いな人の周りには嫌いな人が集まりやすいので、)それぞれが意外だと感じたのではないのでしょうか。また、リーフレットを使い、具体的に「体育嫌い」の声に触れていただきました。

その後、「近代スポーツと男らしさ」というテーマで、近代スポーツの成り立ちや歴史を紹介し、そもそもスポーツが男性中心に成り立ってきたことを確認しました。さらに、「スポーツの『公平性』と多様な性」というテーマでは、本当に男女を分けることだけで公平につながるのかを考えてもらいました。性別以外にも、どの国に生まれたか、お金持ちかどうか、もともと身体的条件など、さまざまな要素によって、公平の意味が変わってくることを確認しました。そして、「権利としてのスポーツ」という考え方に触れました。

最後に、冒頭の問いである「多様な人が共にスポーツを楽しめるようにするためには？」について、私なりの答えを「まとめ」として3点提示しました。1点目は、誰がスポーツにアクセスできていて、誰が排除されているかということに自覚的になることが大事だ、ということです。2点目は、競技スポーツという、より速く、より高く、より強く、を求めるオリンピック的なものだけではなくて、健康のためや楽しみのためにするスポーツや身体活動にも価値を見出すことが重要だ、ということです。3点目は、どのようにすれば多様な人が共にスポーツを楽しめるのかを考えて、実践し続けることの必要性をお伝えしました。(図6)



<p>まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ●多様な人が共にスポーツを楽しめるようにするためには？ →誰がスポーツにアクセスできていて、誰が排除されているのかに自覚的になること →競技スポーツだけでなく、健康のため、楽しみのためにするスポーツにも価値を見出すこと →どのようにすれば多様な人が共に楽しめるのかを考え、実践し続けること

【図6】まとめ

これから、皆さんのコメントとして特に多かったものを3つ紹介していきます。

1つめは、体育・スポーツは「中立・平等」ではないという気づきです。体育やスポーツは、誰にとっても公平で、誰でもアクセスできると思われがちですが、実際には排除や不安、居心地の悪さというものがあるのだと気づいた、という声です。特にご自身が体育好きで、スポーツ好きで、例えば今も体育会に入っています、という人たちにとっては、「体育の嫌いな人の声ってこんなにあるんだ」とか、「LGBTQ+の人々や運動が苦手な人たちにとっては、すごく負担になるんだということに気づいた」という声が多かったです。

2つめは、「規範的な性別」「当たり前」への疑問です。体育って、男子の体育と女子の体育で分かれるよね、更衣室は2つだよ、服装も男女で、もしかしたら色も形も違っていたかもしれない、そういったものが前提になっている、ということに疑問を抱いたという意見です。学校文化に根強い、男女で分けることは当たり前・当然という状況に対して、本当にそれで

良いのだろうか、といった違和感を書いてくださった方も多かったです。それから、スポーツの場にある「勝てる人が評価される」というあり方や、男らしさ女らしさについても、立ち止まって考えてくださった意見が多く寄せられました。

3つめは、体育が嫌い・苦手だった経験の共有です。授業内で、体育嫌いの人の声を20個挙げ、その20個の声のうち、どの声に最も共感したかを SLIDOで投票していただきました。その中の最も共感された声が、「声7」でした。改めて読み上げますと、「チームの中で運動できない人が、明らかにみんなに影響を与える。明らかに足引っ張ってるやん、こいつって思われてしまう環境になるから、体育とかが嫌な経験になったり」という声でした。この声をはじめ、他にもさまざまな生の声を聴いてくださったことで、「本当によく言ってくれた」、「私もめっちゃ嫌いやってん」というコメントを書いてくださいました。例えば、「大縄のときに嫌やのに、飛べやって言われて背中を押されて、すごく傷ついた」、「劣等感を抱いた。だから今も体育というか、スポーツというものが嫌いだ」などです。国語・算数・理科などの教科にはない、体育に独特の、自分の身体が丸ごと劣っているというような気持ちを抱かせる点がよく表れたコメントだと思いました。

まとめますと、「体育・スポーツを『誰のためのものか』という視点で捉え直し、多様な人が安心して関われる場に変えていく必要性を学んだ」というコメントが多かったです。

今日はこの後、コメントを書く機会がありますが、改めて公平性って何だろうということを考えていただきたいと思います。これは、答えがない問いです。皆さんが公平性をどのように考えておられるのかを聞かせて欲しい、という私の声を意識しながらコメントをいただけたらうれしいです。

【司会：北川教授】

関先生、ありがとうございました。

では、笹倉先生、お願いいたします。

6 DE&I入門 第14回講義の振り返り —日本の司法制度における人権問題

笹倉 香奈 法学部教授

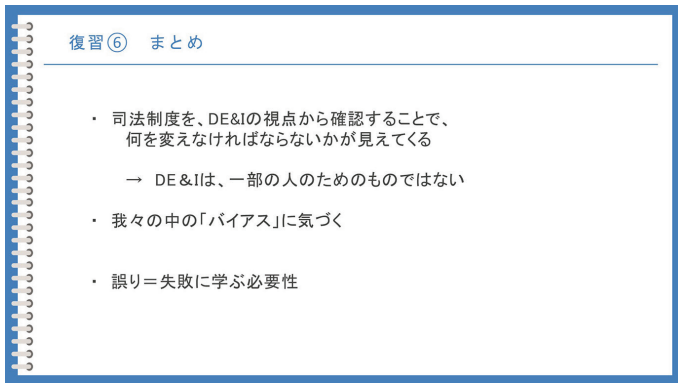
法学部の笹倉です。皆さん、こんにちは。

先週講義をしましたので、まだ大体のことは覚えておられる方が多いかと思いますが、簡単に振り返っておきますと、まず先週の講義では、刑事裁判の原則について学びました。頂きましたコメント、恐らく他学部の方のコメントが多かったのですが、「刑事裁判の原則を初めて知った」というものがありました。検察官に100%の立証責任があるということ、そして検察官が合理的な疑いを超える証明をしなればいけないということ、さらに検察官が立証を尽くせなければ「疑わしきは被告人の利益に」、つまり被告人には無罪が言い渡されなければいけないということ、さらに検察官が立証を尽くして有罪を立証できるまでは「無罪推定の原則」というのがあるのだ、というお話をしました。

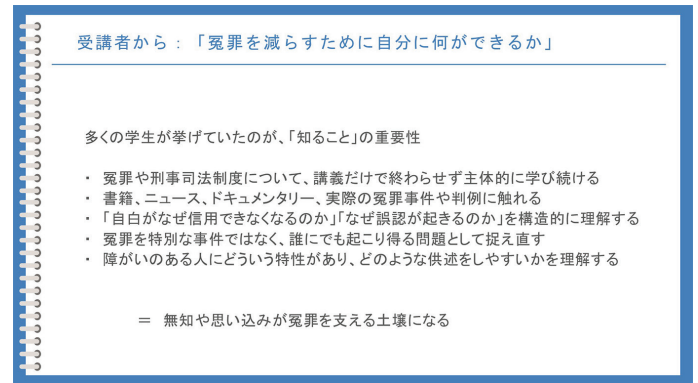


めに自分ができることについて提案してくださいました。自分の思考や態度とつながる問題と捉えていただいたということは、この冤罪という問題の理解を自分事として非常に捉えてくださったことに繋がったのかな、と思います。

引続き考えつづけて下さい。ありがとうございました。(図8.図9)



【図8】まとめ



【図9】受講者から「冤罪を減らすために自分に何ができるか」

【司会：北川教授】

笹倉先生、ありがとうございました。

それでは、この講義のご担当者ではないのですが、D&Iプロジェクトメンバーに加わってくださり、私たちのこのプロジェクトの開始当初からずっとご教授くださり、この『DE&I入門』も全回ご出席くださった文学部特任教授の池上知子先生に、この授業内容全体を踏まえた総括をしていただきます。

池上先生、宜しくお願い致します。

7 DE&I入門 総括コメント

池上 知子 文学部特任教授

こんにちは。総括コメントを仰せつかりました文学部の池上です。私、実はこの3月に退職します。教員生活40年、最後の年に私はこの授業を学生の立場で15回皆勤しました。皆さんは、どうですか。15回とも全部出席しましたか？

私の知っている限り、こんなに熱い熱心な授業は初めてです。皆さんも毎回毎回リアクションペーパーを書かれ、今日もまたいろいろと振り返りを求められ、そしてまたそれへのリアクションを書かなくてはいけないのですよね。随分注文の多い授業だなと感じました。これには、このプロジェクトにかかわっておられる先生方の思い、DE&Iをこの甲南大学で進めていくうえで、まず学生さんに DE&Iのことを知ってもらわねばという熱い思いが反映されています。ですので、この授業、皆さんは毎回、熱意に溢れたお話を次々といろいろな観点から聞かれたのではないかと思います。

私は毎回、熱意に溢れたお話を次々といろいろな観点から聞かれたのではないかと思います。

私も、各先生方が本当に熱っぽく語られるのを聞き入っていました。そしてとりわけ感心したのは、お話された先生方は、皆さんご自分の専門を非常に深く極められており、講義内容にも強い思い入れをお持ちであることでした。しかも、ご自身が得ておられる学問知を知識として伝達するだけにとどまらず、ご自身が実践されていることでした。それは皆さんにもよく伝わったのではないのでしょうか。いろいろな団体を自ら立ち上げられたり、新たな施設の設立に協力されたりと、その辺りは私もす



ごく感銘を受けたといえますか、自分はなかなかそこまでたどり着けていないなと思いました。

ところで、申し遅れましたが、私の専門は社会心理学です。社会心理学は、心理学の中では一番 DE&Iに関わりのある偏見や差別問題を扱う分野になります。社会心理学の基本的なスタンスというのは、心と社会の相互影響過程を解明することです。この授業で聞かれたさまざまな問題は、男女の賃金格差をはじめ、皆さんもご存じの事柄が多かったかと思います。在日コリアンに対するヘイトスピーチの話題もありましたね。そういった社会で起こっている事象を取り上げて、それらを引き起こしている人々の心の中を探るのが社会心理学なのです。

その際、まず言えることは、無知・無関心・無理解というのが、やはり問題を引き起こす原因になるということです。それと同時に、個々の授業で言及されていたように、私たちの心の中にいつのまにか根を下ろし定着しているさまざまな社会通念や常識、性別役割規範であるとか、異性愛主義であるとか家族規範であるとか、それらすべてが原因になりうるのです。社会心理学は、このような人間の心の中にあるさまざまなイデオロギーと申しますか、観念形態や思考回路、それらがいかに負の事象を生み出すのか、ということに関心を向けています。そして、そうした心のしくみを知っていただいて、自覚を促し、意識改革につなげようとしています。もっとも皆さんのように非常に若い世代の方たちは、小中高で平等主義教育をしっかりと受けておられるので、私の世代と比べますと、伝統的な規範意識にとらわれることなく、しっかり物事を考えておられるな、というようには思います。本日の皆さんのコメントをお聞きしても、何も言うことがないくらい、みなさん、立派な見識を持っておられるように思います。

ただ、難しいのは、幾ら気づきを促し意識改革を図っても、無意識の偏見というのがあり、これが厄介なのです。これがあるがために、自分は平等主義的な考えをもっており、男女には差がない、LGBTQを差別する気持ちもない、と言いながら、気がついたら、差別的な行動を取っているというケースがあるのです。自分の個人的な心情とは裏腹に、さまざまな経路を通して、直接、間接に聞き知った言説、幼い頃に植えつけられた観念は、実はずっと潜在意識の中に残っていることが多く、それらに私たちの思考や行動が気づかぬうちに支配されてしまうという、厄介な問題があるのです。その辺りのことまでよく思いを致し、自分の心の奥深くにあるものと向き合ってほしいと思います。

授業ではいろいろなことを学ばれたと思いますが、要するに全ての先生が強調されておられることは、“当たり前を疑え”ということだと思います。それは、そもそもなぜそのようなことになっているのかという疑問をもつことでもあります。授業ではいろいろなことを教えていただきましたが、私も認識を新たにすることがたくさんございました。私も、偏見、差別にかかわることを専門としていますので、曲がりなりにもいろいろなことを勉強していますが、まだまだ心理学だけでは狭いなと思いました。授業ではさまざまな分野の先生から話題を提供いただきましたが、各先生はそれぞれのトピックに精通しておられ、非常に詳しい統計調査や歴史的な経緯などをお話してくださいました。私も初めて聞くこと、これまで知らなかったことが多かったです。たとえば、イスラムのモスクが日本に100以上もあるということは知りませんでした。よく話題となる在日コリアンの問題に関しても、なぜ韓国や朝鮮の人たちが日本で暮らしているのか、それは日本が朝鮮半島を植民地にしようと侵略した歴史が関係することを教えていただきました。なぜ今、そのような事態になっているのかということの歴史的背景を私たちはあまり知らないのではないのでしょうか。そのような歴史的な背景を知ることも重要だと思います。私個人は自分には社会科学の知識が不足しているということを痛感しました。

もう一つ、この授業を通じて発せられたメッセージは、DE&Iを自分事として考えようということだと思います。たとえば、いじめ問題ですが、皆さんのコメントの中にも、いじめについては、自分は加害者にも被害者にもなり得るとありました。それは小・中・高の頃の経験から皆さん自身がよく分かっていて、いじめが学級内で起こるときは、ちょっとした言動によって、自分も含めて誰もが被害者になるし、誰もが加害者にもなる、そういう怖さのある危ういコミュニティの中で暮らしてきたから痛感するのだと思うのです。さらに先週の冤罪のお話から、国家権力あるいは組織の権威の前には、全ての個人が弱者になってしまうということを実感したかと思います。結局は、人間社会では誰もが差別する側にも差別される側にもなるのだということ、今一度肝に銘じてほしいということ、それ故に自分事として考えてくださいということが、各先生のメッセージだったのではない

かと思います。

最後に、そもそも DE&Iがなぜこれほど強調されるのかですが、結局は、今よく言われている共生社会を実現したい、共生社会というのは、あらゆる多様性を尊重して皆が仲良く暮らせる世界のことなのですが、結局は自分が生きやすい世界にしたいということなのです。

第1回目の授業のご担当の阿部先生もおっしゃられたように、DE&Iは優しく、たくましく、楽しくというのが大事なのです。また、そのために学生にできることは何かを考える授業もありました。学生の皆さんができること、例えば留学することもその一つかもしれません。あるいは何かの人権団体に参画したり、ボランティア活動を行うのも良いかもしれません。もっと身近なことでも良いのです。

“Think globally, act locally”という言葉が聞かれたことがありますか？主に環境問題を考える際に言われる言葉です。今、地球規模で気候変動が起こり大変なことになっています。そのことをしっかり認識した上で、でも自分たちに何ができるか、たとえば、ペットボトルをきちんと分別してゴミに出すということぐらいかもしれません。でも、それでも良いのではないかと思います。通勤電車のアナウンスで「お困りの方を見かけられましたら、何かお手伝いしましょうか、とお声がけください」というのをよく耳にしますが、聞かれたことはありますか？そうです、それで良いと思います。クラスの中で、例えば留学生の人が何か困ってそう、補聴器をつけている学生が戸惑っているというような様子を見かけたら、少して良いので手助けしてあげる、そのレベルで良いのです。この“act locally”と言いますのは、自分の足元のところで、ちょっとずつ考え行動するという意味で、そしてそれを繰り返しているうちに、先ほど述べた厄介な無意識の偏見もやがて消滅する、ということがあるのではないかと思います。

少し長くなりましたが、以上で私の総括としたいと思います。皆さん、この熱い授業をよく頑張って聴かれたなと思います。本当にお疲れ様でした。

【司会：北川教授】

池上先生ありがとうございました。各教員がすごく準備して、この1回の担当のために熱く語った授業内容だったと思いますが、池上先生にそのようにおっしゃっていただいて、担当者として、すごく励みになりました。

続きましては、皆さんの番です。このフォームを読み取っていただき、今日のフィードバックを聞いて、感じたことを書いてください。15時45分までに書いてください。

(フィードバックについてフォームに入力)



皆さん、すみません。15時45分までと伝え、皆さんすごく頑張って書いてくださっていますが、一斉に Wi-Fiにつなごうとすると、かなりの負荷がかかっているようです。すみません、45分まで書き続けていただきますが、書き切れなかった人も安心してください。今日中であれば、提出していただけるように、対応を切り替えます。「そうであれば、もう少し熟考して、良いフィードバックを提出したかった」という方には本当に申し訳ありませんが、今日中に書いていただけましたら、我々担当教員は評価に活用させていただきたいと思います。評価はもちろん、授業内容自体の振り返りも含めて、皆さんの書いてくださったものはしっかりと読ませていただきます。



ところで今日は第10回目の授業を担当されました中町先生が来てくださっています。急遽、今日のプログラムを変更し、中町先生からも授業を担当していただいた回について、皆さんからいただいた課題を踏まえ、気づかれたことやコメントをしていただきたいと思います。中町先生には、急なお願いを引き受けてくださり、ありがとうございます。ご担当された回の講義では、私たちの大好きな「なんぼーくん」のイラストをハラルマップに載せることに、いかにハードルがあったのか、というお話をされ、とても印象に残っています。それでは中町先生、お願いいたします。

8 DE&I入門 第10回講義の振り返り —イスラームと共生

中町 信孝 文学部教授



第10回「イスラームと共生」を担当した文学部の中町です。

私の回では、なぜ神戸にイスラーム教のモスクがあるのか、という歴史から始まり、「なんぼーくん」がイスラーム教徒の皆さんにどのように捉えられているかまでをお話したかと思います。しっかりとリアクションも読ませていただきまして、ちゃんと私のお話した内容が皆さんに届いたと分かりましたので、とてもほっとしました。

私の授業は、この講義全体の話からすると各論というか、ケーススタディに当たるかと思います。先ほど池上先生も触れて下さいましたが、日本にはモスクがたくさんあります。100軒ほどです。しかし神社などは1万ほどありますので、それに比べると圧倒的に少ない。本当にマイノリティ、少数派の事例をご紹介しました。ですが、身近にありますので、皆さんも日常生活を送る上でイスラーム教徒の人を見ることは非常に多くなっていると思います。特に最近はずごく可視化されていて、良くない話ですが、ターゲットにされることもあります。排外主義の代表的なターゲットとして、「日本にイスラームが増えている。日本を侵略するのではないか」という話題が、ちょっと質の悪い SNS で出回ってくることに私は個人的に非常に心を痛めています。授業では、そのようなものとは異なる話をするによって、皆さんは SNS を見ても、「また変な人が変な排外主義を振りかざしているな」と思っただけ、いわばワクチンのような形で知識を仕入れていただくことができたかなと思っております。

また近々国政選挙が行われる見通しになり、皆さん恐らく多くの方は有権者ですので、投票という形で意思表示することができます。

神戸にはモスクがあり、イスラーム教徒と接して生きている私や皆さんたちは、決して変な投票行動を取ることはないとは思いますが、ひょっとすると、東京とか他の地方の人が、「イスラームはけしからん！」という観点から（排外主義的な主張を持つ候補に）票を投じることがあるかもしれません。しかし、ここで学んでいただいた受講生の皆さんは、しっかり考えて投票できることと信じています。何も知らないよりは知っているほうが絶対強いと思いますので、イスラーム教徒のことを学んでいただければ、また、継続的に関心を持っていただければ幸いです。

以上です。どうもありがとうございます。

【司会：北川教授】

中町先生ありがとうございました。何か自分たちにできることの一例を今、伝えていただいたかなと思いました。

では、内容を続けてまいります。学生の皆さんが取り組んできた活動、「からふる」の活動について、ご紹介していただければと思います。



9 からふる 活動報告

文学部3年次 藤井 舞衣子さん

皆さん、こんにちは。文学部社会学科3年の藤井舞衣子です。本日の授業資料としてチラシが配付されていると思いますので、そちらをご覧ください。

私たち「からふる」は2024年度に KONAN D&Iプロジェクトの活動の一環として立ち上がった学生グループで、現在は7人のメンバーで活動しています。まず今年度の活動報告をさせていただきます。

前期には、5月にプライドクルーズ大阪というイベントに参加しました。そこでは水上パレードに参加したり、ブース出展では参加者の方に寄せ書きを書いていただいたり、LGBTQ+と学校にまつわるアンケートなどを実施し、そのお礼に手作りのアイロンビーズを配付するなどの活動を行ったりしました。イベントの成果やアンケートの集計結果は後日5号館1階のカフェ&パンセの前と文学部社会学科共同研究室的図書室、調査準備室の掲示板に展示しました。

後期には、今後の活動の参考とするため、レインボーフェスタに参加し、他大学のブースを回って情報収集を行いました。そこで私たちはガイドラインが必要だと考え、現在は甲南大学でLGBTQ+の学生さんや教職員の方が困り事を抱えた時に、どのような支援があるかを可視化したガイドラインを作るために、大阪プライドセンターに相談しながら活動しています。そしてこのガイドラインを今年度中にまとめて、次の新入生に配付できるように進めています。

学部学科学環関係なく、少しでも興味のある方や、プロジェクトに参加してみたいという方がいらっしゃいましたら、メールアドレスやInstagramのDMからご連絡ください。よろしくお願いします。

以上で「からふる」の活動報告を終わります。ありがとうございました。

【司会：北川教授】

ありがとうございます。甲南大学でこのような取組みをしておられる学生さんたちがいるということを皆さんにぜひ知っていただきたいと思ひますし、定期的に活動を行っていますので、よろしければご参加いただいたり、お声がけいただいたりできればと思ひます。

では次です。授業の最初に皆さんにアンケートを行ったかと思ひますが、その結果も学生の皆さんがまとめてくださっていますので、分析結果をお聞きしたいと思ひます。

よろしくお願いします。



10 DE&I アンケート結果報告

文学部3年次 関 凜華さん
文学部3年次 谷口 翔希斗さん

谷口翔希斗さん 本日は、大学が実施した学生対象のダイバーシティに関する実態および意識調査のアンケート結果をもとに、私たちが行った分析についてご報告いたします。発表者の谷口翔希斗です。

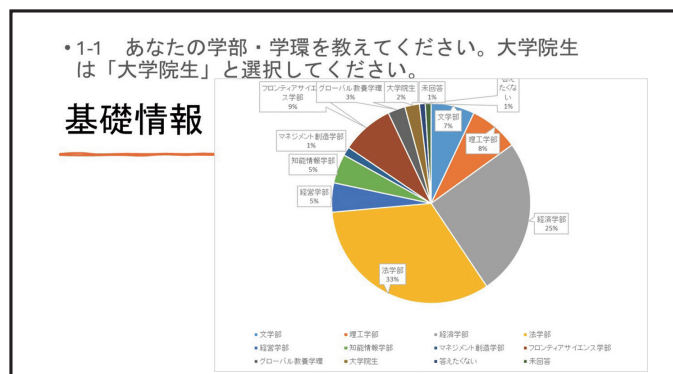
関 凜華さん 同じく文学部人間科学科3年次の関 凜華です。本日はどうぞよろしくお願いたします。

谷口翔希斗さん 文学部大西ゼミ3年次で今回の実態についての検査・分析に関する発表資料等を作成いたしました。多少統一感がなく、見づらい点もあるかと思いますが、あらかじめご了承ください。

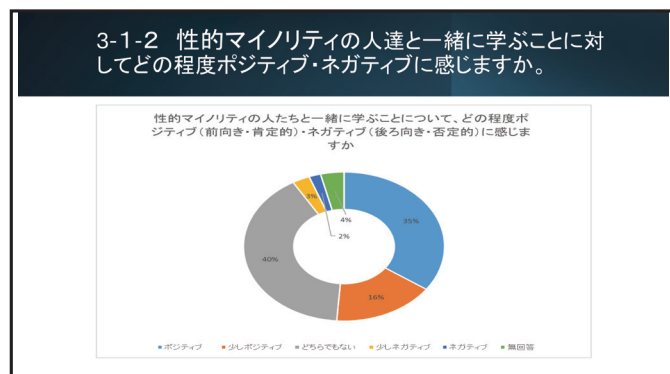
発表の構成といたしましては、まず、性的マイノリティ当事者であるか否かによる、性的マイノリティに対する態度の違いについて説明します。次に、発達障害の有無が発達障害に対する態度に与える影響について取り上げます。その後、YOUステーションおよび学生相談室についてご紹介し、最後にまとめを行います。

はじめに、基礎情報についてご説明いたします。

本アンケート調査にご協力いただいた方々の所属(学部・学科・学環、ならびに大学院)につきましては、図10のとおりです。また、現在の学年についてもお尋ねしました。



【図10】 あなたの学部・学環を教えてください。大学院生は「大学院生」と選択してください

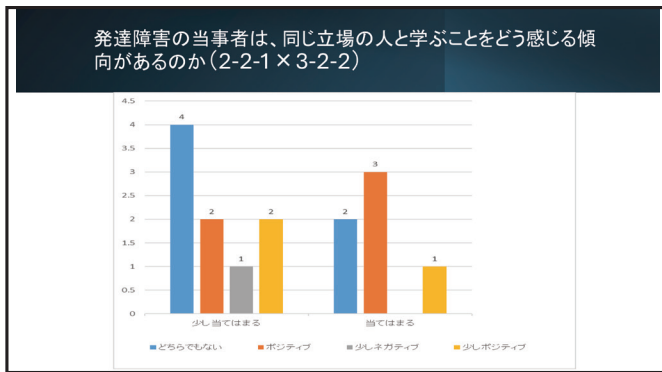


【図11】 性的マイノリティの人たちと一緒に学ぶことに対してどの程度ポジティブ・ネガティブに感じますか

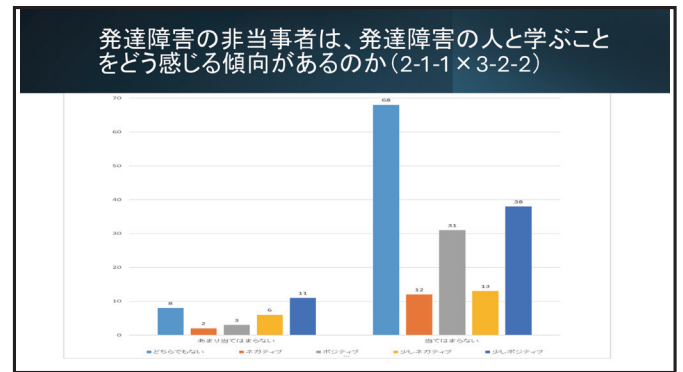
それでは、個別項目の結果についてご報告いたします。まず、性的マイノリティに関する結果です。

「あなた自身は性的マイノリティに当てはまりますか」という質問に対して、「当てはまらない」と回答した方は82%でした。一方、「当てはまる」および「少し当てはまる」と回答した方は、合わせて9%という結果となりました。

次に、「性的マイノリティの人たちと一緒に学ぶことに対して、どの程度ポジティブまたはネガティブに感じますか」という項目です。こちらは全体を母数とした結果です。図11に示しておりますように、「ポジティブ」と回答した方を青、「少しポジティブ」と回答した方をオレンジで示しています。ポジティブに感じている方が全体の過半数を占めていますが、一方で、「少しネガティブ」あるいは「ネガティブ」と感じている方も、少数ながら含まれていることがわかります。一方で、「ネガティブ」あるいは「少しネガティブ」と回答した方も一定数存在しており、当事者の中にも否定的な感情を抱く方がいることが示されました(図12)。



【図15】発達障害の当事者は、同じ立場の人と学ぶことをどう感じる傾向があるのか



【図16】発達障害の非当事者は、発達障害の人と学ぶことをどう感じる傾向があるのか

特に注目していただきたいのは、右側の「自分は全く発達障害に当てはまらない」と回答した群です。図をご覧いただくと分かるように、「どちらでもない」（薄い青）の割合が最も高く、他の選択肢と比較しても顕著であることが読み取れます。

すなわち、明確にポジティブでもネガティブでもないとする回答が多いことが特徴の一つといえます。しかしながら、その中でも「ネガティブ」（オレンジ）および「少しネガティブ」（黄色）の割合は、性的マイノリティに関する結果と比較するとやや高い傾向がみられました。この点は、本結果の一つの特徴であると考えられます。

さてここからは、これらの結果を受けて、今後の展望として、私たちがこうしたら良いのではないかと思うことを、お話ししていきます。皆さん、YOUステーションと学生相談室ってご存じですか？ ご存じの方、今、軽く手を挙げていただきたいのですが、まずYOUステーションをご存じの方はいらっしゃいますか？ありがとうございます。次に、学生相談室をご存じの方はいらっしゃいますか？ありがとうございます。

学生相談室は比較的良好に認知されている一方で、YOUステーションの認知度はそれほど高くないことが分かりました。この傾向は、アンケート結果のグラフからも同様に確認できます。YOUステーションについては、「知らない」と回答した方が約4分の3以上を占めていました。それに対して、学生相談室を「知っている」と回答した方は67%であり、約7割近くの方が認知しているという結果となっています。

以上を踏まえ、まとめに入ります。

まず、それぞれの結果を整理したうえで、最後に学生相談室とも関連づけながら今後の展望について述べます。

発達障害については、有無による比較の結果、発達障害がないと回答した学生の方が、発達障害のある学生と共に学ぶことに対して、よりネガティブに感じる傾向がみられました。

また、発達障害がある、あるいはその可能性を自認している学生も少数ながら一定数存在することが確認されました。こうした学生に対して、適切な環境や支援体制を整えることは重要であると考えられます。

また、性的マイノリティの有無に関する比較では、性的マイノリティではないと回答した学生の方が、性的マイノリティの学生と共に学ぶことに対して、よりネガティブに感じる傾向がみられました。さらに、アンケート結果からは、性的マイノリティに該当する学生も少数ながら一定数存在していることが確認されました。

一方で、学生相談室の認知度は高いものの、YOUステーションの認知度は全体の4分の1程度、あるいはそれ未満にとどまっています。発達障害のある学生が気軽に利用できる場として今後十分に機能させていくためには、提供している支援内容やその存在自体をより積極的に周知し、認知度を高めるとともに、利用への心理的ハードルを下げることが重要であると考えられます。

以上が、私たちがなりに整理した今後の課題と提案です。

今後も、こうしたサービスを必要とする学生に対して適切な支援が提供できる体制の整備および環境づくりは、大学にとって重要な課題であると考えられます。

以上です。文学部人間科学科大西ゼミ3年次生からの発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。

【司会：北川教授】

ありがとうございます。多様性、そして共生に関する状況、実際の声を学生さんから聞かせていただいて、それをまたこのようにまとめてくださって非常に私たちも強いメッセージをいただいたかなと思っています。ありがとうございます。

このような形で盛りだくさんで今日の授業内容を進めてきました。締めくくりには甲南大学副学長で全学教育推進機構長の高先生からお言葉をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

11 総括

甲南大学副学長 全学教育推進機構長 高 龍秀教授

皆さん、お疲れさまでした。今日も多くの先生方にお話をさせていただいて、学生さんが後半に発表もしていただきました。「からふる」という団体の紹介もありました。

この授業で D&Iに関連した活動を学生さんが実際にされているということが分かったと思います。また皆さん自身が答えられたアンケートですが、自分たちの同級生はこのように感じ・考えているのか、YOUステーションって知らなかったなど、アンケート結果から、皆はこのように思っているのだということが分かり、同学年の仲間たち・他の甲南大学生の考えを聞く機会になったと思います。



さて、この授業を受講する前よりも、考え方や意識が大きく変わりましたか。変わったのでは?!違いますか?どうでしょうか。若干名、うんうんとうなずいて下さっていますね。ありがとうございます。

この15回の授業を通じて、つくづく我々が住んでいるこの社会、そして人々は多様性に富んでいる、と理解されたと思います。障がいを持っている方もおられるし、在日外国人の方もおられる。日本に住んでるイスラム圏の方もいらっしゃいますし、性的マイノリティの方もいらっしゃいますし、本当にいろいろな、多様な人々が我々の社会を構成している。もちろんそのことは、単語ぐらいは知っていて、何となくは知っていて、感じていたけれども、授業で90分しっかり学ぶと、こういうことなのか!と分かるような授業だったと思います。受講生の皆さんは大半が1年次生だと思いますので、これからの学部・学科・学環の学びの参考にしてほしいと思います。

また、授業の中でいろいろな当事者の声もあったと思います。当事者をサポートしている方の話もあったと思います。当事者のお話と言いますと、12回目で在日コリアンの話がありましたが、韓国の済州島から大阪関西に来る方が多いとのこと。私はそれ聞きながら、あっ、自分のことだと思いました。私、当事者なのです。おじいちゃん、おばあちゃんの代に韓国のチェジュ島、済州島で生活していたのですが、植民地の時代の様々なつらいこともあり、私の父親が5歳のとき、私の母親が9歳のときにおじいちゃん、おばあちゃんと一緒に日本に渡ってきた。関西、大阪に渡ってきたとのこと。

私は経済学部で基礎ゼミを担当し、受講する学生がおられるのですが、皆さん、基礎ゼミの担当の先生が在日コリアンだとか、他学部でも海外ご出身の先生もおられます。ゼミの先生がネパール出身だという方もおられます。大学というところは、ある意味で非常にグローバルです。そして社会も同じなのです。いろいろな民族の人から社会というものは成り立っています。皆さんがアメリカに留学したら、もう突然マイノリティになります、ということですね。そのようなアメリカで、現在トランプ政権が留学生受け入れを厳しくしている、アメリカに住んでいる外国人に対する厳しめの排除政策を行っていますが、そのようないろいろなマイノリティに対して、イスラム圏の話でもありましたが、排除して、この社会から出ていけ、という感覚で対応するのか、包摂して社会の一員として取り入れるのか。そのマイノリティの人々の良さや持ち味を発揮してもらうような、そのような社会にするのかというのは、非常に重要な、もう紙一重の違いだと思います。恐らく企業でも社会でも、包摂して多様なマイノリティが生き生きと生きられる社会の方が強いし、楽しいという、そのようなことをこの授業で皆さん学んだのではないかなと思います。

皆さんが社会へ出ますと、企業で働けば、同僚に障がいを持っておられる人や、自分の上司は中国人、アジア系の出身だなど、当然さまざまあるわけです。そのような環境に置かれる際、この授業で学んだことをぜひ大切にしてほしいと思います。

最後に、「からふる」の皆さん、アンケートを分析してもらった学生の皆さん、本当にありがとうございます。以上で私の話としたいと思います。ありがとうございます。

甲南学園・甲南大学は引き続きダイバーシティ&インクルージョンに取り組みます

甲南学園は2024年3月1日に、ダイバーシティ&インクルージョン宣言を公表しました。大学では2025年度から新規科目として『DE&I入門』（基礎共通科目）を開講し、学生がD&Iに触れる機会を設けました。教育を通し、D&Iに関する知識・意識が浸透するよう、より一層邁進してまいりたいと考えております。

これからも甲南学園・甲南大学の取り組みを温かく見守っていただき、ご支援賜りますよう、お願いいたします。

KONAN Diversity & Inclusion Project とは

2023年に始動したKONANプレミア・プロジェクトの一つ。甲南大学におけるダイバーシティ（多様性）とインクルージョン（包摂）の取組を推進することを目的としています。マイノリティのおかれた状況を理解し、多様性を受け入れ包摂するキャンパスを目指すことは、甲南学園創立者：平生飢三郎の説いた「共働互助」にもつながります。教職員の意識の向上、教育への展開、制度・環境の整備へとつなげていくプロジェクトです。2025年度からは特に学生教育に特化した活動を推進し、学生参加型活動も通して学内外にD&I意識の浸透に努めています。

2025年度の取組み

◆ 大学の動き (KONAN Diversity & Inclusion Project)

1 D&Iの理解と意識を高めるための研修やシンポジウム、研究会等の開催

1月16日：『DE&I入門』公開授業の実施と本冊子の刊行

2 学生を対象としたアンケート調査、学生参加型の活動推進

・ダイバーシティに関する実態と意識についてのアンケート分析

・学生参加型活動「からふる」の活動展開：学内でD&Iに関する掲示、学外イベントへの参加、LGBTQ+パンフレットの刊行

3 D&Iの重要性・宣言の意味を考える基礎共通科目『DE&I入門』の開講

2026年度の取組み（予定）

1 D&Iの理解と意識を高めるための研修やシンポジウム、研究会等の開催

・手話講座やライティングサポート講座の開催：YOUステーションとの共同開催を含む

2 学生を対象としたアンケート調査、学生参加型の活動推進

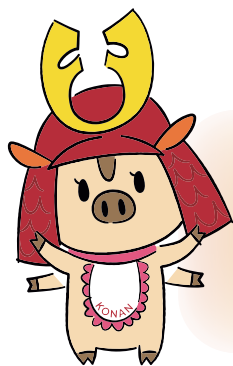
3 D&Iの重要性・宣言の意味を考える基礎共通科目『DE&I入門』の開講（2年目）

4 『DE&I入門』の成果をまとめた出版物の刊行準備（2027年度刊行予定）

甲南学園のダイバーシティ&インクルージョンの取組みは甲南学園のHPで紹介しています。シンポジウム等のご案内も行いますので、ぜひご覧ください。



https://www.konan-u.ac.jp/konan_diversity/



ようこそ、DE&Iの世界へ

DE&Iって何？そう思われた方、ぜひ一緒に学びましょう！

気になる時が、学び時、です！！

甲南大学基礎共通科目「DE&I入門」2025年度新規開講記念 公開授業誌

2026年3月

 甲南大学

編集：甲南大学 KONAN プレミア・プロジェクト

「KONAN Diversity & Inclusion Project：彩り豊かなキャンパスの成長に向けて」チーム

発行：甲南大学学生支援機構事務局 〒658-8501 兵庫県神戸市東灘区岡本8丁目9-1